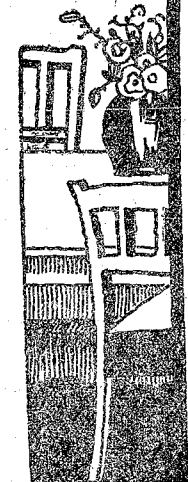


研究



再び共榮圈内の經濟狀況と交通問題 (上)

H T 生

比律賓と蘭印の比較

検討することとしたのである。

前號迄に於ては共榮圈内の經濟開發と交通と題して三回
に亘つて佛印泰及びビルマを主として書いたのであるが、
これだけでは未だ共榮圈内の全部ではないのみならず、我
國の南方政策……米英をして所謂城下の誓ひをなさしめる
には、濠洲及び印度は當然問題に現はれるのである否な既
に問題化してゐる、従つて今度は稿を改めて、蘭印及び比
律賓更に進んで濠洲及び印度の經濟關係とその交通問題を

比律賓は帝國海軍は對米英開戰の劈頭に於て布哇で米國
の太平洋戰艦五隻を擊沈し四隻を大破して、その軍事施設
を破壊し太平洋における米國の海上勢力を全滅したのに次
いで、マレー沖の海戰に於ては英國の東洋艦隊旗艦プリン
ス・オブ・ウェルス、及び戰團艦レパルスを擊沈して、そ
の主力を殲滅するに、次ぎ西太平洋の海上權を一舉に掌握
せる帝國海軍援護の下に帝國陸軍は先づ比島のルソン島北

部に上陸作戰を敢行し、續いてルソン島南部にも上陸して陸海空の立體作戰の下に比島全土を制壓して日章旗を翻したところである。而してこのフィリッピン群島の全面積は約二十九萬六千二百餘キロであつて朝鮮、臺灣、樺太、南洋領土、澎湖列島を合した面積と大體に於て等しく、丁度我國の二分の一弱に當つてゐる、島の數は七千八百三といふ驚く程の多數であるが、そのうち約三分の一は無名島である、最大の島はルソン島であるが、ミンダナオ島がこれに次ぎこの兩島の面積は全群島の七割を占めてゐる。而してこの群島の位置は支那滿洲蘇聯沿岸州を除くと我國最近距離にあつて、即ち亞細亞大陸の東南に位し、北緯四度四十分から二十一度十分の間、東經百十六度四十分から百二十六度三十四分の間を介して、その東南の海は深度一萬八百米に達し世界の最深の海であるといはれてゐる、東京からマニラまでは二千九百八十五キロ、神戸を出帆して上海、香港に各一泊し八日目にマニラに着くことが出来るのである。この群島の中でも最北のヤミ島の如きは我が臺灣を離

れる事僅かに百四キロに過ぎない程で、日比は正に一衣帯水の間にあるにも抱らず、米英の所謂對日包圍陣中にあつて不自然不合理なる障壁が設けられてゐたのであつた、併乍ら東亞共榮圈が名實共に完成され國際情勢が安定するに至らば彼我の經濟的發展に多大の効果を及ぼすであらう。而してこのフィリッピンは彼の千八百九十八年の米西戰爭の結果米國の領有となつたやうではあるが、一體この米西戰爭といふものは最初はフィリッピンとは何等の關係ないキューバ問題に端を發して、比律賓が只だ單に西班牙の領土であるからとて米國に占領され、その結果として偶然米國の領土となつたやうなものゝ實は、米國の比律賓領有計畫は米西戰爭前からあつたのである。想へば千八百八十八年四月に米西戰爭が始まつたのであるが、その以前から時の海軍次官であつた後の大統領セオドル・ルーズヴェルトを中心とする米國の帝國主義者等は相寄つて密かにフィリッピンの領有を計畫し、デューイ提督を太平洋艦隊司令長官に任命して、この提督の率ゆる太平洋艦隊は米西戰

争の始まる前年の十二月七日に米國を出帆して、戦争開始二ヶ月以前にルーズヴェルトはデューイ提督宛に全艦隊を香港に待機せしめて開戦と同時に直ちにフィリッピンを攻略すべき秘密電報を送つたのであつた、かくの如く米國の比島攻略は開戦前から十分用意されてゐたのであるからマニラの陥落も開戦と共に比較的容易であつた、この時過日新聞紙にも現はれた、比島革命の志士アギナルドはシンガポールに亡命中であつたが、米西戦争勃發の報を聞いて時正に到れりとなし、大急ぎで歸國して、兵を擧げて米國海軍と協力してスペイン軍と戦つたのであつたがアギナルドは陸上に於てスペイン軍を一掃して一應軍事目的が達せられたので千八百九十九年一月二十三日にマニラの北方マロモスに革命政府を樹立してフィリッピン共和國憲法を布告し自から大統領に就任したのである、然るに比島にある米國軍はマニラに本據を設けて西班牙軍が比律賓軍に依つて征定されるのを待つて本國から陸軍を到着せしめて自ら行動を起し得る状態となると俄然態度を改めてフィリッ

ン共和國政府を否認して且比軍のマニラ市に入るを禁じたのである、そこでアギナルドはシンガポール駐在の米國總領事ブラットが比島獨立を約束したことを理由として米國軍と交渉を重ねたが容れられず、逆に千八百九十九年二月四日に米軍歩哨の唯何事件を導火線として米比兩軍の衝突となり、この戦果は米國側の勝利となつて、こゝに比律賓は完全に米國の領有となつたのである、併乍ら比島には完全獨立の聲があり亦他方米國でもフィリッピンの領有は經濟的にも軍事的にも不利なりとの説は漸次擡頭し來り獨立承認の氣運は益々促進されたのである。

このやうな状況のうちで千九百三十三年には彼のヘーア・ホーズ・カツテング法が米國議會を通過したが、この法律は比島議會の反對によつて效力を發生せず、翌三十四年にはタイデングス・マクダツファイ法の通過となつて、比島議會も又これを承認したがこの法律によつて、フィリッピンは千九百四十六年七月四日に正式合衆國の統治を離脱して獨立國となることを約束されたのである、茲に比島獨立

ビ革命政府が千九百三十五年十一月十五日に樹立されて初代の大統領には今や米軍によつて濠洲に羅致されてゐると云はれてゐる、マヌエル・ケンソが當選就任したのである。

これを要するに比島は政治的には一步步々自治から獨立に進みつゝあるかの如くであるが、經濟的には全くこれと逆行して千八百九十九年以來逐年對米依存の度合を高め現在に於ては既に獨立不可能と思はしめる状態に達してゐたのであつた、かやうに比島の獨立なるものは矛盾を孕むものであつたのである。

序いでに現在この比律賓の政治組織を一筆書いて置くが、フィリツピンの憲法は千九百三十四年の獨立法を基礎として千九百三十五年に制定されて、これが米國憲法に倣つて三權分立の原則を持つてゐる、行政權は大統領に委任され、人民の一般投票によつて選舉せられるのであるが、任期を四年として再選は出来るが、八ヶ年以上同一人が大統領となることを禁止してゐる。而して大統領は行政權の最高機關として行政各部を指揮監督し、又比島の陸海軍の總

司令官として全軍を統率すると共に行政各部の長官その他高級官吏は大統領の指名によつて比島議會の任命委員會の承認を得て大統領が任命することになつてゐる、かのケンソは千九百三十五年に大統領に就任してゐたのであるが、千九百四十一年に再選されたので同四十三年には退職しなければならぬことになつてゐる。

全體比律賓の産業基礎は農業である、これはその輸出額の九割までが農産物であることから見ても窺知出来るのである、これは比島は克く地味が肥へて、加ふるに日光が豊富であるがために農業の發達に最も適してゐる結果である、可耕地面積の點から見ても全面積二千九百六十二萬九千六百ヘクタールの内、千八百五十九萬四千三百ヘクタールまでは農業に最も適してゐる状態である、然るに現在までに耕作されてゐるのは僅かに二割五分程であるがこれは灌漑の便が乏しいのと農業技術の進歩してをらないのに基因するのである、而して比島の農産物中最も重要なものは米にして、この米は全國到るところに産出するが、特に

中部ルソンの諸州は比島の穀倉と呼ばれて、全産出米の過半、即ち産額五千三百萬カバン、金額にすると、一億三千六百萬ペソといはれてゐる程である、然し米は比律賓人の常食であるからこれでもなほ國內の需要を充すに足らないので、年々佛領印度、泰等から金額にすると五百萬ペソ乃至二千萬ペソの輸入米を仰いでゐる有様である、米に次いでフィリッピンの農産物は砂糖の原料たる甘蔗である、全島四十八州中三十二州に亘つて栽培されてゐるが、その植

付面積は約二十一萬八千ヘクタール、生産額一千五百萬擔に達して、これが金額にして約一億一千四百萬ペソである、これは内地の需要の外大部分は米國に輸出されてゐる、椰子はルソンの東南部から以南の島嶼に多く栽培されて全世界需要額の三割を供給してゐるが、マニラ麻も亦植付面積約五十萬ヘクタール、生産額二百六十萬擔、金額にして二千三百萬ペソに達して重要輸出品の一つとなつてゐる。玉蜀黍も亦比島人の常食となつてゐるから、全島到るところに栽培されてゐるが、その植付面積は約七十萬ヘクタール、

生産額約九百萬カバン、金額にして約二千萬ペソである、煙草も亦産物の一つであるが植付面積七萬五千ヘクタール、生産額七萬八千キントル、金額にして四百萬ペソを産するのである。

林業はフィリッピン全面積の約七割が森林地帯である關係上全國到るところに良材が産出するが、ラワン、ヤカル、アピトンの世界各地に輸出されてゐる量は多大に上つてゐる、若しそれ水産業に至つては魚類の種類は千六百二十種に及ぶと云はれてゐる位であるから従つて魚類は極めて豊富である、されば比島の水産業は將來益々有望である、併乍ら現在に於てはフィリッピン人は漁撈法に十分の熟練をしてをらないために産額は比較的になく年々百萬ペソ内外の魚類罐詰を却つて輸入してゐる位である。

鑛業に付いては比島は頗る鑛石の種類に富み、金屬としては金、銀、銅、鐵、錫、鉛、亜鉛、マンガン、クロム、モリブデン、等が埋藏せられてゐる、この内金は主としてルソンの北部に産出さるゝが、産額は約百萬オンス、

金額にして七千二百萬ペソに上つてゐる、鐵鑛は主としてブラカン、スリグオ等に産しその埋藏量は約八百萬噸年産額百萬噸であつて、あの資産凍結令前までは殆んど全部我國に輸出されてゐた。銅鑛はマウンテン地方に産して、その産額二萬五千噸、金額にして七十三萬ペソ、精選銅は二百三十萬ペソになつてゐる、又クロムは年産額十三萬二千噸、金額にして二百三十萬ペソであるが、其他非金屬として石炭、岩鹽、石灰石、アスファルト、石材等が産出されるのである、全體比島の鑛業は埋藏量の點からも又年産額からも決して世界一流の鑛業國とは比較にならないが、その種類の多様なること、大東亞の地域に鑛産物の埋藏量が比較的に少ないといふ點から觀察して、將來は相當に重要視さるゝであらうと思はれるのである、工業はフィリッピンは元來原料生産國であるから大體に於て不振である、その擧げられるものは、製糖、製油、製銅、製帽、酒精、貝釘、刺繡加工業、セメント工業等である、近時政府の保護獎勵の下に著しく發展したとは云へまだ幼稚の域を脱して

ゐない狀況である加ふる、に種々の社會立法が制定せられて最低賃銀法、八時間労働法等の如き高度工業國の制度がそのまゝに採用されてゐるから發展も中々容易ではないと思はれる。

比律賓の資源と經濟的關係はかやうな狀況にあるが、これに多大の關係を持つ比島の交通狀況を觀察すると、フィリッピンの交通は大體に於て陸路、水路、空路の三つに分かれてゐる、空路は千九百三十五年十一月二十九日汎米航空會社のチャイナ・クリツパー號が鵬程八千浬の太平洋越えてルネク海岸にその姿を現はした時から極めて顯著なる發達を遂げて國立及び民間の空港、着陸場の數は八十を越える状態となり、その主要航空路はマニラ——パキオ、マニラ——パラカレ——ナガレ——レガスピ間はフィリッピン飛行グクシー株式會社がこれを經營し又マニラ——イロイロ、イロイロ——バコロド、マニラ——イロイロ——ダバオ間はイロイロネグロス航空會社の經營となつてゐる水路の方は比島が七千以上の島嶼から成つてゐる關係上、

相當に發達してはゐるが大部分は外國船舶に依つてゐる、即ち千九百三十九年の比島船舶統計に見ると英國の船舶が百七十八萬七千噸で第一位を占め我國の船舶が百五十六萬五千噸で第二位を占めてゐる、次いで和蘭船舶の八十四萬一千噸、ノルウエー船舶の六十七萬九千噸であるが米國は五十八萬七千噸、デンマークは八萬八千噸、フィリツピン自身の船舶は二萬三千六百噸となつてゐる、而してその他合計六百九十一萬一千噸であるが、歐洲情勢の變化のため英國を始め歐洲諸國の船舶は引上げ、又は徵用された結果、最近までは我國の船舶が最も重要な地位を占めてゐたが彼の資産凍結令のために我國の船舶も寄港しなくなつたのでフィリツピンの水路交通は非常なる支障を來したたのであつた、而して比島政府は各島内の水路交通のみは外國船舶に許可せずして比島船のみに許可してゐたのである。

陸上交通としては鐵道道路等であるが、鐵道の發達は非常に遅れてゐるが、自動車道路は實によく發達して一等道路約一萬三百キロ、二等道路約六千四百キロ、三等道路約

二千九百キロ、山徑約四千六百キロを有してゐる、この道路開設は比島政府が特に注意するところであつて、各都會は勿論地方に於ける新道路の開設及び改善は逐年著しくなつてゐた、全くフィリツピンの陸上交通の根幹は道路に置かれてゐると云つて可なりである、今茲に道路建設費の各年別表を見ると。

年度	建設費 比仙
一九三〇年	一五、二四五、八〇七、七四
一九三一年	一六、四〇九、四八七、六九
一九三二年	一四、六二九、二〇一、五九
一九三三年	一四、八二八、九六三、七〇
一九三四年	一三、九〇六、〇八一、一九
一九三五年	一五、三九一、五二一、八四
一九三六年	一五、三六六、〇二七、一九
一九三七年	一七、一七一、〇七七、二二
一九三八年	二四、二一七、八一六、五九

となつてゐる。これを見てもこの國の財政状態から觀察して如何に比島政府は道路建設費を支出して道路の改良に力

を注いでゐるかは窺はれるのである。かやうの次第であるから比島は群島到るところに完成された一二等道路には約六萬臺の自動車バスが馳せ廻つてゐる、就中乗合自動車網は全比島に張り廻されてこれが比島陸上の重なる運輸機關となつてゐる、従つて設備も次第々々に完成されて數年以前の設備と現在の設備とを比較すると隔世の感がある、現在では流線型四十一人乃至四十七人乗の高級バスが正規走路を時間正しく走つてゐる、千九百三十九年比島政府は乗合自動車四百三十九臺の増設許可をしたがそれで現在では總數四千四百五十七臺あつて、これ等の陸上運輸業の投資額は五千六百六十八萬九百七十八比で大部分は米比人の所有である。

鐵道は現在比律賓では馬尼刺鐵道會社と比律賓鐵道會社の二つがあつて前者はルソン島、後者はセム島にその事務所を置いて異々經營してゐる、マニラ鐵道は千八百九十二年英國人の手に依つて創設されたものであつたが革命の頻發に依つて莫大なる損失を蒙り一時經營難に陥つたが米領

となると千九百十七年八百萬比の鐵道公債を發行して改善に努力して今日の基礎をなしたのである、比律賓鐵道は本據をセブ島に置いて同島のアラガオ・ダナオ間及びバナール島のカピス・ブエノセスタ間を經營してゐるが、この外にもルソン島及びネグロス島に散在せる製糖會社並に製材會社の布設した私設鐵道がある。こゝにマニラ鐵道の旅客及び運賃收入を見ると。

年 度	旅 客 數	運 賃 收 入
一九三五年	七、〇四一、六三五	二、八三八、一七八、二二比
一九三六年	八、九二五、六二四	三、〇三三、七四五、二九
一九三七年	一〇、二七九、一一一	三、七五八、二二八、三二
一九三八年	一〇、一五八、六一九	四、一六二、九一七、七八

となつてゐる、更に比律賓鐵道の方は。

年 度	旅 客 數	運 賃 收 入
一九三五年	二、七九〇、四七四	四五四、二一五、九四比
一九三六年	二、五四四、八四六	四五六、八二三、三四
一九三七年	二、四七二、六九三	四六九、七四八、〇一
一九三八年	二、四六九、二五六	四七〇、三七一、四〇

となつてゐる、これを見ても比島の鐵道は餘り發達してゐないことは判明するのである、尙比島には現在マニラ市のみに約六千臺の馬車がある、元來比島は西班牙領有半世紀後の千五百八十五年に始めて馬匹を輸入したが當時は有福者の官吏、地主、僧侶等が所有してゐたのに止まつてゐたが次第に發達して米國領有の千八百九十八年から漸次増加して現在に至つたのである、又自動車の比島輸入は米國領後であつて、千九百十年には二百五十臺であつたのが同三十八年には五萬千七百五十一臺と云ふ驚くべき増加率を示して正に東洋一の自動車王國と云はれてゐる。

蘭印はいふ迄もなくスマトラ、ジャヴァ、ボルネオ南半、セレベス、モルツカ群島及びニューギニア島西半を併せたものゝ總稱であるが、この内ジャワは蘭領印度の政治文化の中樞をなす島であり蘭印中で最も經濟的に發達してゐるのはジャヴァである、ジャワの産業は天然の好條件に恵まれてゐる米がその大宗である、千九百三十九年の統計に依ると耕作延面積四百五萬ヘクタールに對して、その收穫

高は穀八百二十萬噸を産して米はジャワに關する限り消費を充たして毎年多量に移出してゐる、砂糖も亦輸出農産物の大宗であつて現在では約百六十萬噸を生産してゐる、ゴムは主としてジャワ以外の外領に生産するが最近の生産高は七萬千噸である、その外規那、茶、煙草、コカ、カツク、玉蜀黍等を産出するが、鑛業は外領が主である、然しジャワにも相當の鑛業がある、その主なるものは石油であつて、ジャワは主として中部以東に産出し年産額は原油約九十萬噸である、石油採掘會社は現在までは大部分英蘭會社のローヤル・ダツチであるが、米國のスタンダード系のコロニヤルも現在では採油を始めてゐた、石油に次ぐ鑛産物はマンガン約一萬噸、銅其他の鑛物もあるが現在は未開發である、尙鑛業ではないか鹽も東部ジャワで年産二十萬噸に上つてゐる。

蘭印……ジャワ等の工業方面は最も遅れてゐる、現在でも尙住民の家庭工業である、更紗細工等又は機械修理工業乃至は小規模の日用品製造工業の域を脱してゐない、これ

はこれまで政府の工業政策の影響も大であるが、蘭印は世界の工業國に對する重要原材料の供給國であるから、これらの輸出によつて貿易は常に出超の狀況を示し財政は豊かで國民の購買力も旺んである。故に日常必需商品は充分輸入し得らるゝのみならず、徒らに國內に工業を起すよりは寧ろ原料を輸出して製品輸入の方が遙かに有利であるから工業が發達せないのである。併乍ら最近に於て其の第一は織物布工業であるが陶磁器、硝子、石鹼、塗料等幾多の工業が興りつゝある、今次世界大戰の勃發以來國防上の見地から一層ジャワの工業に拍車をかけてゐたが、勿論この工業と稱するものは大部分日常生活の必需品であつて、總括的に現在の工場状態は織布工場百二十八、石鹼工場十、ゴム製品工場八、硝子工場五、製材工場四十、皮革工場二十、製紙工場五、煙草工場三十と云ふ有様である。機械金屬工業では機械工場五十三、同修理工場百五十二、鐵道關係工場十九、鑄物工場五、海軍工廠一、陸軍工廠一、造船所八、自動車組立工場十一、電氣器具工場八の各工場である、更に

最近では食料品及び飲料品の工業も急激に増加を示してゐるか全般的に觀察すると未だ發達はこれからである。

而してこれ等資源……工業、産業……經濟に多大の關係を有する陸上交通機關は主として云ふまでもなく鐵道と道路であるが、現在鐵道の布設されてゐるのはジャワとスマトラの二島に過ぎない狀況である、即ちジャワに五千四百八杆、スマトラに千九百七十五杆と併せて七千三百八十三杆である、これが蘭印に於ける鐵道の總延長杆である、殊に蘭印のうちでも最も經濟が發達してゐるジャバの鐵道が未發達であつたのは地勢上山嶽が多くて建設費が莫大であるのと、雨季には熱帶的豪雨のために河川の氾濫も又地震の脅威があつたことも、沿岸には船舶運輸が發達せるために利益が保證されぬ限り民間では鐵道建設に當るのを躊躇したことに等しいのであつた。従つて、當初は駱駝、驢馬、象等の動物を利用する原始的交通機關が陸上輸送の役割を果してゐたのである、更れば國營鐵道の建設については和蘭本國でも又當地でも反對があつたが千八百六十二年最初

の鐵道建設を獲得した蘭領印度國鐵道會社が財政上の困難と戦ひつゝ建設に乘出して、千八百七十二年に漸くにしてスラカルタのソロ及ジョクジャカルタよりスマランに達する鐵道とウイレム一世に至る支線計二百四十料を完成したのであつた、次いで西端のバタヴィヤ・ポイテンゾルク間五十料を開通せしめた以後營々として建設に努力して、遂に千九百三十七年に至つて共同經營の鐵道は延長八百六十三料に達したのである。

國有鐵道は千八百七十五年初めて建設に着手されたが、スラバヤからパンギルを経てバスルカンへ、更にパンギルからマランへの分岐線が建設され、千八百九十四年にはバタヴィヤからポイテンを経て更にチャンドウル・パントン・マオスを経てデヨタヂヤカル迄國有鐵道によつて旅行が出来るやうになつたのである、國鐵は其後も漸次發達して西はズンタ海峽迄、東はバナルカン、及びバリ海峽に面するバンユツンギまで延びてゐる、かやうにしてジャワに於ける國有鐵道の總延長は千九百三十七年末現在は二千九百廿

九料であるが、更にスマトラにも國有鐵道は北部西部海岸及び南部にて夫々三線布設されてゐる、而してこれ等の鐵道は砂糖、茶、煙草、コーヒー、ゴム、胡椒等の生産品が盛んなのでこれ等生産物の供給輸送に依存して、ゐるが又軍事的の目的にも重點を置いてゐる、今こゝに參考までにジャワ國鐵其他各鐵道の收入數を見ると。

年度	收 入	年度	收 入
一九二九年	七〇、七八二	一九三六年	二三、二一八

これはシャバ國有鐵道であるが、スマトラ國有鐵道の方は。

年度	收 入	年度	收 入
一九二九年	二一、〇一七	一九三六年	四、六〇二

となつてゐる、更に各私設鐵道を見ると。

年度	收 入	年度	收 入
一九二九年	九、六七四	一九三六年	四、六七一
一九二九年	二一、七六一	一九三六年	六、三三六

デリ鐵道會社

蘭印領印度鐵道會社

一九二九年 六、〇五一 一九三六年 一、八八二

スマラン・チェリボン鐵道會社

一九二九年 四、四七五 一九三六年 一、二一〇

スマラン・ジョアナ鐵道會社

收入單位は全部「チフローリン」になつてゐるが、これを見ても世界經濟恐慌の始まつた千九百二十九年に精糖工場
の九十%以上が閉鎖して、その他の輸出縣も同様に萎縮し
延いて鐵道貨物輸送量が漸次減退して現在に至つてゐるこ
とも判明出來ると共に、生産供給地の本質として常に經濟
恐慌の餘波を受けることを立證さるのである。

ジャワの道路は最も克く發してゐる、千九百二十二年に道
路改良計畫を立て、から、現在道路の延長はアスファルト
道路八千六百キロメートル、アルアスファルト以外の舗裝
道路は一萬四千キロメートルを有してゐる、又其他の道路
は四千キロメートルを算して合計二萬六千七百キロメー
ルに達する程發達してゐるのである、特にジャワの西端か
らチェリボン・スマラン・スラヴィナ等を経由して、東端

のバリ海峽に達す幅十五米、延長千三百杵の縦貫國道は
最も最代的なものである、甚だ一寸奇異は思はるゝのは國
道の建設工事には貨幣租税に代ふるに封建的遺制である勞
働税たる賦役が當てられることである、兎も角かく如のく
道路が發達してゐるために自動車の數も極めて多いのであ
る、ジャワに於ける自動車數は最近の調査に依ると自家用
一萬八百臺、同自動自轉車三千四百臺、營業用自動車三千
二百五十臺、貨物自動車千五百臺、乗合自動車四百臺であ
る。

海運業も蘭印は多數の島嶼から成立してゐる關係上非常
に發達してゐるが、戰前までは汽船及び重油船は蘭印籍の
ものは合計三百四十七隻、七十二萬六千噸を持つてゐたで
ある、ジャワ第一の港タンジョンプリオクに於ける一年の
入港船舶數は三千隻に上ると云はれてゐるが、蘭印領内の
内海航路はこれまでケ・ピ・エム汽船會社の獨占事業であつ
て到るところに定期航路が開かれてゐた、又定期航空便も
最近急激に發達して、ジャワの主要都市間には毎日二回乃

至三回の航空便があり又シンガポール、スマトラ、ボルネオ、セレバス、ニューギニア間にも毎週二回乃至三回の航空路が開けてゐた、これが蘭印の大體經濟狀況と交通の概要であるが、比律賓も蘭印も今や米英の對日包圍陣の前衛として嘗ては飽なき彼等に躍らされてゐたのであるがこの包圍陣陣形は直ちに破壊されて東亞共榮圈の確立につれてやがては我國と政治經濟上密接なる位置にをかるのである、否な既に置かれつゝある、想ふに今次大東亞戰爭が開始さるや皇軍の精銳は機を逸せずして比律賓攻略作戰を展開し、昨年十二月十日ルソン島の北端の要衝アパリ及びびザイガンの壯烈なる敵前上陸を敢行して、更に十二日には同島南部レガスピに上陸以つて南北相應する猛進撃により、僅かに二旬餘にして早くも首都マニラを陥落せしめて、こゝに米國の東亞侵略の最大據點を覆滅して比律賓全島制壓の端緒を開いたのであつた、唯だ僅かにバタン半島の天險とコレヒドール島の要塞によつて目途なき抗戦を續けてゐたが、今回總攻撃開始以來僅かに八日にしてバタアン半島

の完全攻略なつて、過去半世紀餘に互る米國の壓制に呻吟した比島は僅かにコレヒドールに依る敵軍を除いて、全島が大東亞共榮圈の重要な一環として更生することとなつたのである、コレヒドールの要塞も亦今や風前の燈である、恐らくは、本誌の出る頃には完全に陥落するが、回顧すれば千五百二十一年マゼランの比島發見に刺戟されて、西班牙が千五百六十四年レガスピをルソン島に派遣して同島を征服以てマニラ市を建設首府としたのは千五百七十二年である、比島全島をその赫下に收めたのは千六百年頃であつた、諸列國に比して東亞侵略にやゝ立ち遅れた米國は十九世紀末に起つた比島獨立運動の好機を捉へて比島人を利用し欺瞞して西班牙を追拂つて比島を米領としたのである、其後多少の曲折を経て千九百三十五年比島は自治領となり十年後の千九百四十五年に共和國となることになつてゐたのである、この比島が眞に比島人の比島となり共榮圈の一翼として更生することは誠に喜ばしい次第である。

「四月十五日記」